
赤い部屋

雪兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤い部屋

【Nコード】

N2848K

【作者名】

雪兎

【あらすじ】

部屋にある小さな穴。覗くと見える赤い部屋。貴方は部屋が赤いのだと思いますか？それとも赤い何かがそこに……

俺の部屋には指一本ほどの小さな穴がある。

そこから見える小さな風景。

真っ赤に染まっている風景。

不思議に思つて指を突っ込んだのが間違이었다……

学生寮に住み始めて早半年。

「お前の部屋、広いよな」なんて一人なんだよ」

「うるせえ。なんだか隣の部屋がいわく付きで誰もここに近づかねえからだよ。何ならお前もここに住むか？隣なら一人だぞ」

「きよ、拒否します」

そう。隣の部屋は過去に自殺した人がいたそうだ。

寮母さんから聞いた話では、とある正体不明の病で真っ赤な目で生まれてしまった女の子が住んでいたそうだ。

2

その子は虐められていたけど堪えていた。

ある日、投げられた石が左目に当たり、失明してしまった。

片目を失った真っ赤な目の女の子。

虐めはさらにひどくなる一方。

女の子はついに堪えられなくなってしまい、自らの命を絶つてしまった。

しかも、その女の子を虐めていたのはこの部屋に住んでいた同級生。

そんないわくが付いている部屋に誰も寄り付こうとせず、隣は空室、この部屋は俺一人と言うことだ。

「ま、俺はそんないわくは気にしねえよ」

現に半年たった今も何も起きていない。

親友達も遊びに来るから寂しくもない。

不安なんて何もないのだ。

「つて、もう八時じゃねえかつ。遅刻するっ」

「一時間目は鬼の鬼頭だっ」

「急げっ！」

俺は荷物を手にとって部屋を出て行った。

「ただいま〜つて誰もいねえか」

寮の部屋に入っても誰もいるわけがない。

この部屋に住んでいるのは俺一人だから。

「やっぱり一人も落ち着くなあ」

団体行動をするより一人でいるほうが楽だ。

部屋の中に置いてあるコタツに足を突っ込んでいつものように寝転がる。

「ん？」

俺は不思議なものを見つけた。

「今朝はこんなものあったか？」

寮の壁に空いた小さな穴。

指が一本は余裕ではいるが二本は絶対に入らないくらいの小ささ。

穴の先にある部屋は赤い目の女の子が自殺のした、いわくの部屋。

「ちよつと見てみようかな」

恐怖心より好奇心が勝るお年頃。

入ったばかりのコタツから這い出て小さな穴に近づく。

ゆっくりとその穴を覗き込んでみると……部屋は真っ赤だった。

「うわあ……マジかよ」

真っ赤に染まった部屋。

流石にこれじゃあ人は寄り付かないよな。

俺は穴を覗き込むのをやめて、再びコタツの中に戻る。

隣の部屋があんなだったなんて……少しビビッた。

寒気を感じたが、すぐに親友が部屋に入ってきたからそんな寒気、

すぐに吹き飛んでいった。

次の日の朝、目を覚まして部屋を見回してみるとまだ小さな穴は残っていた。

また少し気になって覗いてみたが、部屋は赤いまま。

ゾツとしたのですぐに離れて、朝の準備をした。

準備が整うと、親友が部屋に来た。

先ほどの赤い部屋を忘れるために他愛もない会話をして気を紛らわした。

授業が終わって部屋に戻ってきてても小さい穴は残っている。

覗きこんでみると真っ赤なまま。

しかし真っ赤な風景が少し動いた気がした。

「ん？なんだ……」

部屋が動くはずがない。

何かがいるのか。

そんなわけではない。

何年も隣には誰もいない。

じゃあ何で動いた。

しかも赤い部屋全体が。

頭の中で色々と考えが巡ったが答えは出てこなかった。

「……ちよつと指を突っ込んでみるかな」

俺はその小さな穴に自分の人差し指を思いっきり突っ込んでみた。

「ぎゃっ」

「!?!?!」

何で人の悲鳴が。

何で指に感触が。

「……くも……」

向こうの部屋からかすかに声が聞こえる。
人の声だ。

「よくもっ!!」

そう叫び声が聞こえた瞬間、突っ込んだ指に激痛が走った。
指を引き抜くと第一関節より先がなくなっていて、血が流れてい
た。

何が起きた。

誰の声だ。

激痛と謎の人物。

二つが混ざり合って正しい答えが導けない。

「今行くから待ってるっ!!」

そう言う声が聞こえて、隣の部屋の扉が勢いよく開けられる音が
聞こえた。

俺は慌てて玄関の鍵を閉め、チェーンをかけた。

次の瞬間、ガタガタと扉を引く音が聞こえた。

堪える。堪えるんだ。

少ししたら親友が来てくれる。

そしたら寮母さんや警察を呼んでくれるはずだ。

「開けるっ!!開けるおっ!!」

恐怖に震えながら、コタツの中にこもった。

そんな恐怖の中にいるのに、なんとなく、小さな穴の風景が気に
なった。

ガタガタと鳴る玄関を無視して、小さな穴を覗き込んでみる。そこには真っ赤に染まった部屋はなかった。部屋の中にあつたのは天井から吊るされているロープ。何で俺はさつきまで赤い部屋を見ていたのだろう。少し考えればわかる気がするが、恐怖の中で頭が回らない。早く来てくれよ、親友。

ダンダンガタガタ、ガタギシガタギシ。

扉が軋んでいく音が聞こえてくる。あと少し持ちこたえてくれよつ。

ガタギシガタギシシ、ガタギギギ、ガタガタバキツ。

「やっと開いたあ」

「ひっ」

扉が壊れてしまった。

玄関にいたのは真っ赤な目を持つ女。

左目を閉じて、真っ赤な右目で俺を見ている女。

そうか。さつきまで隣の部屋が赤かった理由がわかった。

コイツが俺の部屋を覗いていたからだ。

何で覗いていたかはわからない。

だけどこれだけはわかる。

コイツはヤバイ。

イノチがアブナイ。

オナナにコロサレル。

逃げなきゃ……シヌ。

「よくも……よくも左目をッ!!」

女は扉を壊した馬鹿力で俺の首を掴んできて……一瞬で意識が飛んでいった……

(後書き)

怪談話第九弾、赤い部屋です。

豆知識(だみ声)

つて言っても半オリジナル的なホラーなので今回はナシですかね。自分がネットで怪談や都市伝説を探していると見つけた『赤い部屋』という都市伝説。

クリックしてみると内容はシンプルでした。

『部屋にある穴を覗くと赤い部屋が見える。誰かが住んでいるのかを大家さんに尋ねると、隣には病気でこもっている女性がいるとのこと。その病気とは目が真っ赤になってしまう病気。隣の部屋は真っ赤なのかを大家さんに尋ねるとそんなことはないとのこと。実はその女性が部屋を覗き込んでいたのです』
と言う内容でした。

そこから自分なりにアレンジしてみたんですが……いかがでしょう？
自分が常に誰かに見られていると考えるとゾツとしますね。

それが真っ赤な目ならなおさら。

前回の『ひきこさん』に続いて、これは単なる殺人事件では？と思う自分ですw

まあお互いに可哀想な出来事で妖怪になってしまった者ということ
でご勘弁w

次回作をご期待していただけるとありがたいです

あと、常に情報提供していただけるとうれしい雪兎ですw
ではノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2848k/>

赤い部屋

2010年10月8日15時23分発行